松江市山代方墳の諸問題

渡　辺　貞　幸※

Archaeological Survey of Yamashiro Hofun Tumulus in Matsue City.

Sadayuki WATANABE

1．はじめに

松江市南郊の山代・大庭古墳群は，出雲における最有力古墳群の一つとして知られている．この古墳群の盟主墳の位置を占める山代二子塚古墳（前方後方墳）については，かつて詳細な検討を試み，あわせてこの古墳群の性格についても新たな視点から考察を加えたことがあった(渡辺1983)．本稿は，同じ古墳群内で山代二子塚古墳のすぐ東隣りに立地する山代方墳をとり上げて，最近実施した墳丘測量調査の成果をもとに考察しようとするものであり，山代・大庭古墳群の再検討という意味で，前稿の続編をなすものである．従って，前稿でふれた諸論点についてはここでは繰り返さないことをまず初めにお断りし，御諒解をいただきたいと思う．また，墳丘測量調査報告という本稿の性格から，考察の対象を主として墳丘と採集遺物の問題に絞ることも，お許しいただきたい．

山代方墳は松江市山代町（旧八束郡大庭村大字山代）字二子塚にある大形方墳で，古くから石室が開口している[(1)]．石室の存在については，古く明治年間に大道弘雄氏が「籔中に石槨の口の一方を露出して居る」と紹介され（大道1908)，その後梅原末治氏もふれておられる（梅原1918）が，墳丘については，旧『島根県史』（野津1925）に「円墳羨道入口露出土塊筋(ママ)入」とあるので，円墳という認識であったようである．その後,「日本文化史上より観たる島根県の古墳」という調査に取り組んでいた野津左馬之助・須田主殿両氏の実査によって，昭和15年春に大形方墳であることが確認され[(2)],「大庭村の方型墳」として広く学界にも紹介された[(3)]（野津1940）．

野津氏のこの報告は，周辺部がまだかなりよく残っていた時期の観察と聞き取り調査とによっているので，きわめて興味深い内容を含んでいる．氏はこの古墳を次のように描き出しておられるが，今日からみると多少疑問の点もあるとはいえ，その雄姿を見事に表現した文章であると言えよう．

> 上面幅十二尺長さ一辺二百二十八尺の外堤が正方形に作られ，其の内側に幅十八尺の濠が外堤に準じて正方形に周らされ，此に漫々たる清水を湛へたる中央に，恰も蓬萊島の如く一辺の長さ百三十七尺高さ百八(ママ)十尺のピラミッド型の方形墳が屹然として立てる其の偉容は，実に四方を圧するの感があって，其の景観は誠

※　法文学部考古学研究室

に荘重のものであったらうことは想像に難くない．従って被葬者の社会上の地位と豪威とを今日に於ても推定する事が出来やう．

山代方墳はその後，山本清氏らによって実測され，墳丘・石室等に関する基本的データも発表され（山本1951・1968）て，今日に及んでいる．わたくしたちの今回の作業も，これら先学の業績を再確認し，その上に立って行なったものであることは言うまでもない．

2． 山代方墳の測量調査

2．1 測量調査の経過と視点

測量調査は1982年8月から翌年6月にかけ

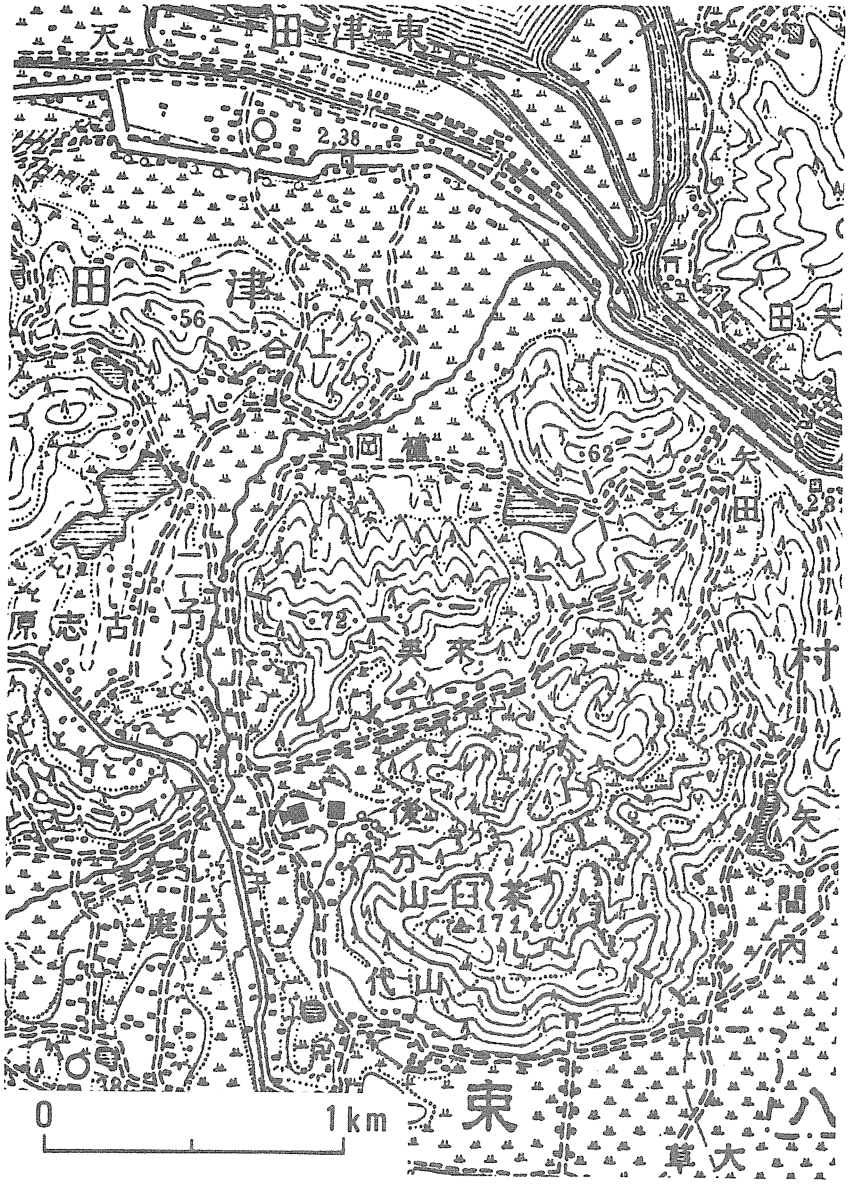


図1．山代方墳と山代二子塚古墳の位置

て，三次にわたって実施した．参加者は法文学部開講の授業科目「考古学実習」の受講生と島根大学考古学研究会の有志を中心とする人々であった[4]．

山代方墳の測量では，墳丘と周辺地形の正確な把握とともに，墳丘と石室の関係および山代二子塚古墳との正確な位置関係の把握を目指した．測量にあたっては，二子塚古墳測量のさいに確認した基本的観点と方法を踏襲したが，今回は等高線間隔を25cmとしている．また，わたくしたちのとった図幅の合成と周辺部の航空写真測量，および国土座標系への取り付け等については，前回同様，測量会社に発注した．出来上り図を200分の１と500分の１の二種としたことや，基準点や永久杭の位置をそれぞれの第二原図に記入させたことも前回と同じであるが，今回は国土座標のほかに経緯度の記入も依頼した．永久杭の座標上の位置などに関するデータは，本学考古学研究室に保管している．本稿では，500分の１

図２．山代・大庭古墳群周辺地形図

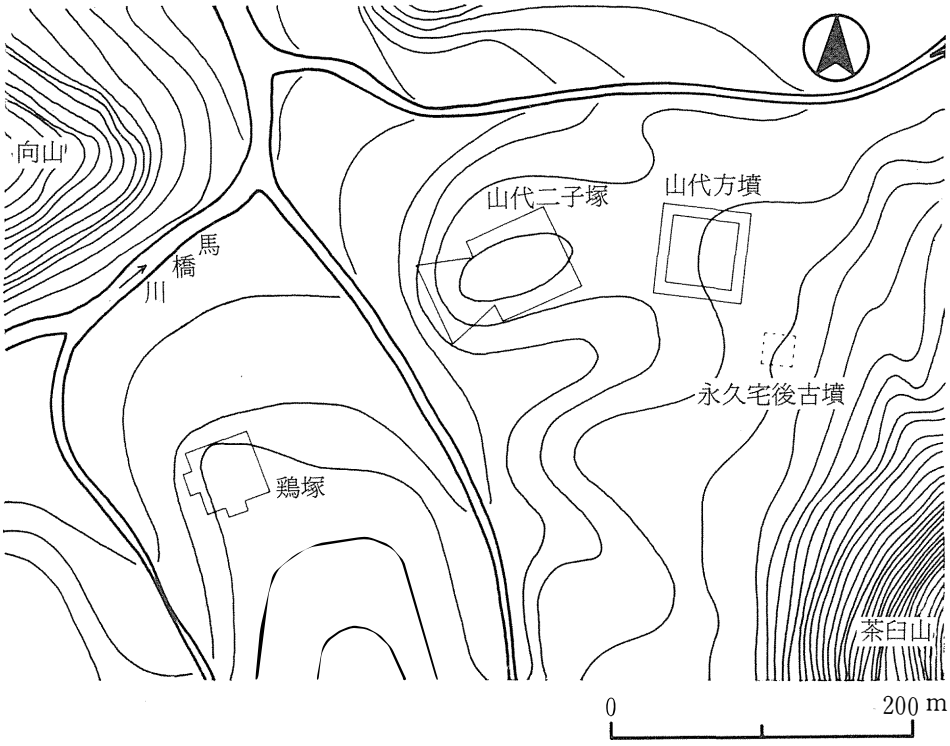


図3．山代・大庭古墳群周辺の旧地形想定図（等高線間隔は2m）

原図（経緯度は省略）を折り込みとして掲載する．

2．2　古墳の立地

山代方墳を含む山代・大庭古墳群の全体的な選地の問題については前稿で詳しく論じた．ここではその再論は避け，明治32年測図の地形図[5]によってその位置を示すにとどめたい（図1）．

次に，古墳群周辺の地形について，今回の測量調査の成果もふまえて作成した図2と，それをもとに復元推定した旧地形想定図（図3）とによって述べておきたい．

図2は，ほぼ現状における（一部旧地形を復元した部分もある）周辺地形を示しているが[6]，茶臼山北西麓の緩傾斜地に立地している山代方墳の様子がよくわかる．茶臼山の北西麓には，西に延びる舌状の小台地があり，その根元近くに山代方墳が，その先端寄りに山代二子塚古墳が立地しているわけである．また，永久宅後古墳[7]は，この舌状小台地にはのらず，その南の谷状部分奥のやや高所に築かれており，その占地のあり方が注目される．

これらの古墳の立地する台地の西には，鍛冶屋谷と呼ばれる谷があり，この谷を隔てた西側には，南から北へ細長く延びている台地（長者原台地）がある．大庭鶏塚古墳は，この台地の突端を切断し盛土して作られていると考えられる．

全体として山代・大庭古墳群は，鍛冶屋谷を囲むようにして形成された古墳群と言うことができるであろう．

2．3　現状の観察

山代方墳は周溝をめぐらした二段築成の方墳である．南側が一部削られているため，現

状では長方形に近い形となっているが，墳丘頂上を古墳の中心として復元すれば，本来はきちんとした正方形のマウンドであったと確認できる．古墳は東から西へ下る傾斜地に立地しており，墳丘の東西では，現状の周溝底や周溝外の高さで2m近い高低差がある．図4の東西方向の断面図でみると，古墳の東西外側の傾斜を結んだ線は，墳丘1段目上面（テラス状部分）の両端あたりを結ぶ線と大体一致している．墳丘1段目テラスの本来の高さは不明であるが，現状のその端部が本来の高さとさほど違っていないとすれば，ゆるやかに傾斜する旧地形をほとんどそのまま利用して1段目を作っている可能性が強いと考えら

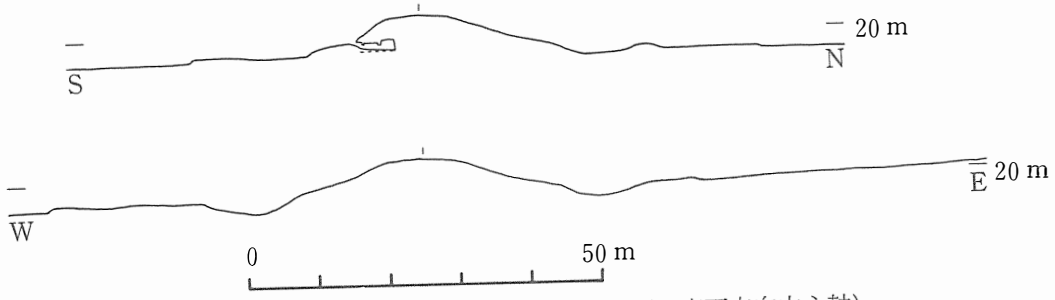


図4．墳丘断面図（上：南北方向中心軸，下：東西方向中心軸）

れよう．

周溝は，おそらくこの旧地形を掘鑿する形で掘られたものであるが，全面的に破壊されている南辺を除く三方では，大体よく遺存している（折り込み図参照）．とはいっても，北側と西側の周溝はかなりの変形を受けており，特に北側の堀と西側の堀の北部およびそのあたりの墳丘下半部は，庭木栽培地として利用されて著しく掘り返されており，苗木の穴だらけと言ってもよいほどの状況である．西側の堀の南半部も等高線が大変乱れているが，これは外（西）側の外堤上に建物を作ったさいの土の移動などによるものであろうか．また，現状では比較的良く旧状をとどめているかにみえる東側の周溝のあたりも，前記の野津氏の報文によると，実は地均しを受けて原形を損じているという．

従って，周溝の本来の幅などについては不明と言わざるをえないのであるが，以上述べたことを斟酌した上で現状を大まかに測ると，外堤と墳丘1段目の見かけのテラス端との距離は10～12mである．また，このラインを基準にした現状の溝底の深さは，深い所で約2mである．なお，この周溝は地形的にみて，本来からぼり（隍）であったと考えた方がよいであろう．

周溝の外側にかつて土塁がめぐっていたことについては，野津氏の報告や山本氏の観察によって明らかであるが，今日ではそれはきわめて痕跡的である．北辺のそれが土手状の狭い道となり，西側の一部でもわずかにそれらしい痕跡がある程度である．また，東側は10m位の幅のゆるやかな土塁状をなしているが，野津氏はこれを地均しをした結果であると指摘しておられる．但し，野津氏と共に調査にあたった須田氏の談として，土塁の幅を6間（約11m）とする新聞報道（大阪朝日島根版1940）があるので，共同調査者の間で見解が分かれていたのかもしれない．野津氏は，北方外堤の東端部はかつて幅が約12尺あった

という土地所有者の談を紹介して，本来の外堤土塁の幅はどの辺も約12尺（3.6m）であったと推定している（野津1940）.

周辺部が大きく改変している現在となってはこの問題の解決はむずかしいと思われるが，将来東側の外堤部で確認の調査をする必要があるだろう.

墳丘は二段築成のあとをとどめているが，かなり土が流れていて，傾斜変換線をたどることすら困難な状況となっている．従って，現状で各部の規模を推定復元してもあまり意味がないと思うが，すでに原形をとどめていない南側以外で敢えて計測すると，墳丘1段目のテラスの幅は8m内外である．墳丘2段目は大体22m四方の大きさであり，墳頂は平坦とならずゆるやかなドーム状をなしていて，その大よその範囲は一辺10mほどである.

墳丘全体の規模は，周溝内の立ち上り部から測って東西約45mあり，周溝内側の上端（1段目テラス端）から測ると東西38～39mである．南北もほぼ同様であったと考えてよいだろう．最高所の比高は，現状の東西の周溝底レベルの平均を基準にすると約6.8mであり，周溝外堤のレベルの平均からは4.8m前後の高さをもっている．周溝を含めた東西外堤の縁までの距離は，中央部で63m前後あり，これに外堤土塁の幅を加えた四方がこの古墳の兆域ということになる.

なお，墳丘上には人頭大の礫石がかなりみられるが，ボーリング所見では，本古墳に葺石があったかどうか確認できなかった．測量中に墳丘斜面や周溝部で少数の須恵器片と埴輪の小片1個を採集した．これらについては次章で紹介する.

2．4　墳丘と石室との関係について

墳丘南側に開口している横穴式石室は，整美ないわゆる石棺式石室として著名である．ここでは，石室構造そのものについてはふれず，墳丘のいかなる位置に石室が作られているかについてのみ考えてみたい.

現在，石室内には多量の土砂が堆積しているが，床面の推定レベルは17.7m前後と考えられる．このレベルは，現状の墳丘の石室付近でみると，墳丘1段目テラス状部分のやや低い部位に相当する．また，玄室天井のレベルはほぼ19.5mなので，天井石上面は20m前後と考えられ，明らかに墳丘2段目中にある．この事実から，この石室は墳丘1段目上か，もしくはそれよりやや低い面の上に構築され，石室全体は墳丘2段目の盛土で覆われていると考えることができる．さきにも記したように，この古墳の1段目は，旧地形を多少整形するだけでほとんどそのまま利用しているのではないかと想像できるのであるが，そうだとすれば，この石室は旧地形を整形した上に，もしくはそこを多少掘り込んで半地下式にして作り上げたものと考えることができよう.

このことは，本古墳の造営工事がまず石室を作ることから始められたことを意味している．つまり，周溝の掘鑿と2段目墳丘の盛土に先立って石室構築が行なわれた可能性が強いのである．これは，この古墳の墳丘の軸と石室の主軸とがかなりずれている事実と関連があるかもしれない．石室構築時と墳丘造営時とで，故意か偶然か，その基準線が変ったということは考えられないであろうか.[8]

3．採集資料について

3．1　採集品の概要

本古墳では従来から若干の遺物が採集されている．それらのうち，現在八雲立つ風土記の丘資料館に収蔵されているものについては，

岡崎雄二郎氏によって報告がなされている（岡崎1983）．そのほかに，島根大学歴史学教室に山本清氏らによって採集された十数片の須恵器が保管されており，また，今回のわたくしたちの測量調査のさいにも多少の遺物を採集した．島大保管品の一部については，かつて山本氏が簡単にふれられたことがある（山本1960・1968）が，詳しい紹介はなされていないので，ここでは島大保管品とわたくしたちの採集品について解説する．

資料は大部分が須恵器片で，他に埴輪の細片が1つある．埴輪片は，わたくしたちが墳丘北斜面で採集したもので，本古墳採集の唯一の埴輪片である[9]．表裏面とも黄橙色(7.5YR 7/8）のやや厚手（1.8cm前後）の胴部小破片だが，完全に風化していて表面の観察も不能なので，図を省略した．

3．2　須恵器

須恵器片を図5と図6に示す．このうち，図5の4と図6の1は北側周溝の西寄りで，図6の3は西側周溝北部で採集されたものである．他は本学に以前から保管されていたもので，山本清氏によれば，このうちのいくつかは石室前面付近での採集品である．また，図6の4と5（同一個体であろう）は，1963年5月に採集されたものであるが，採集地点については記録されていない．

図5と図6の6は装飾付須恵器（退化した形態の脚付子持壺）の破片である．図5の1は子壺の胴部破片で，内外面とも横ナデ，外面下部には親壺（体部）との接合のさいの指オサエのあとが明瞭に残る．底部に貫通孔の一部を辛うじて認めることができる．

図5の2～6は親壺（体部）と脚部との接合部の破片で，鍔状突帯をもつものともたないものとがある．すべて脚部上端の内側に底無しの親壺下端をあてて貼りつけ接合している．親壺下端を脚の内側に貼りつける手法は，さきに紹介した山代二子塚古墳採集とされる須恵器でも共通しているが，本来底のある親壺の底部を脚台の上にはめ込んで貼りつけた古式の脚付子持壺における手法の伝統を，継承したものであるとみることができよう．接合部内面の調整はきわめて粗雑で，横ナデを基本とするが不規則な方向のナデや指オサエも多用されている．外面は，鍔のあるものでは鍔部とその上下を横ナデ，他は縦ナデしているものが多い．図5の6は，親壺下部にタタキのあとを内外面に残し，外面はその上を横ナデしている．図5の4は，脚部上端に接して長方形の透孔をもつ．

図5の7～9と図6の6は脚部の破片である．図5の7は，採集品の中では例外的に大形の脚部片で，沈線をめぐらし内外面ともきれいな横ナデで仕上げているが，焼きは多少甘く灰白色を呈する．図6の6はやや粗雑で，粗い縦ナデのあと沈線をひき，逆三角形の透孔を穿つ．内面には紐作り痕を残している．図5の8・9は垂直に近く立ち上る器形を示し，表裏とも脚端部は指オサエと横ナデ，上方は縦ナデである．

図6の1～5はタタキ痕のある胴部破片で，3・4・5はタタキのあと外面に横ハケを粗く施している．これらには，脚付子持壺の親壺胴部の破片も含まれていよう．

3．3　採集須恵器の検討

前節で述べた採集須恵器のほとんどは退化した形態の脚付子持壺であり，さきに岡崎雄二郎氏が紹介された資料も，やはりこの器種が大部分を占めている[10]（岡崎1983）．なお，同氏が報告された資料と前記の資料とを比較してみたが，同一個体に属するものは見当らな

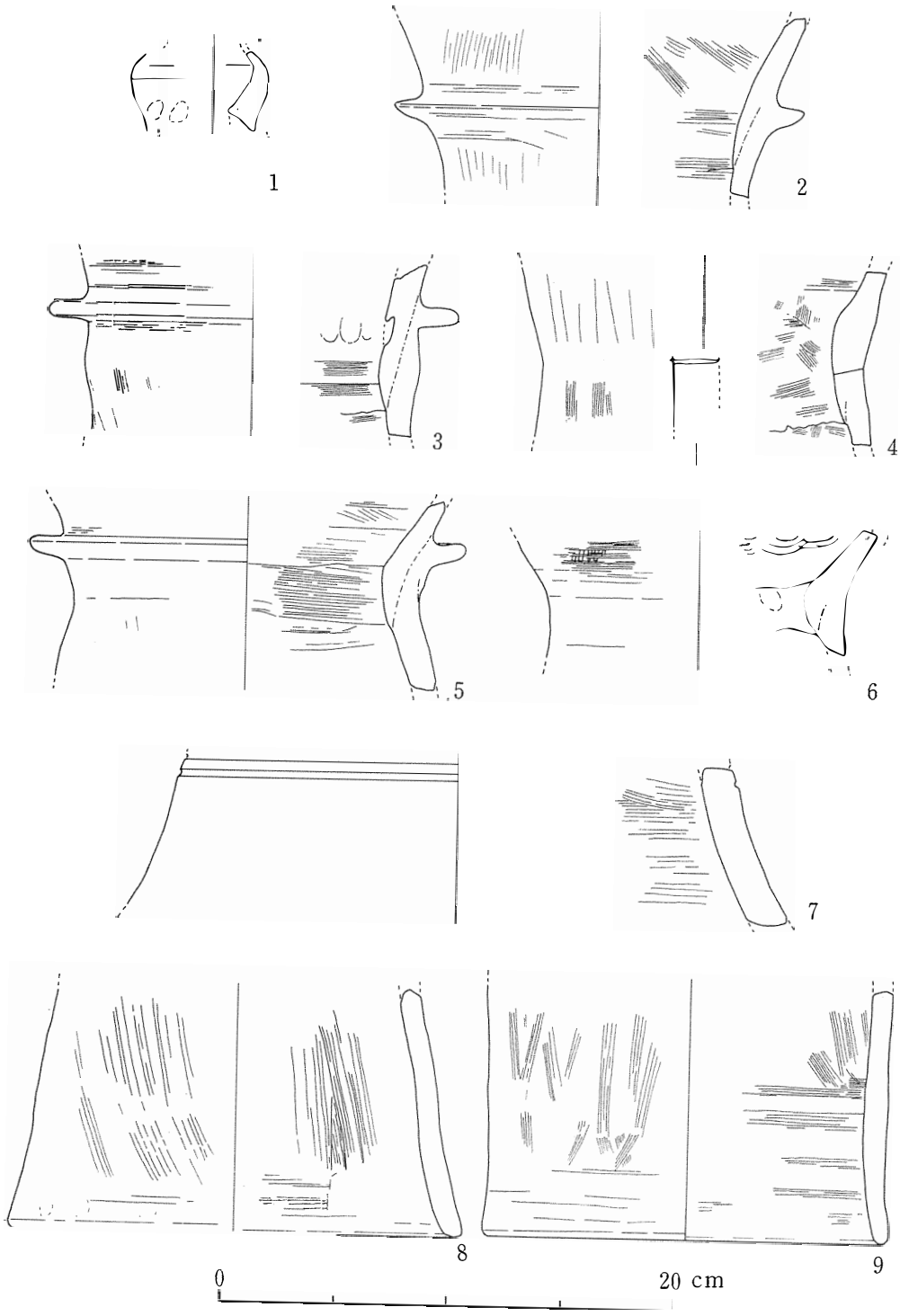


図５．採集須恵器(1)

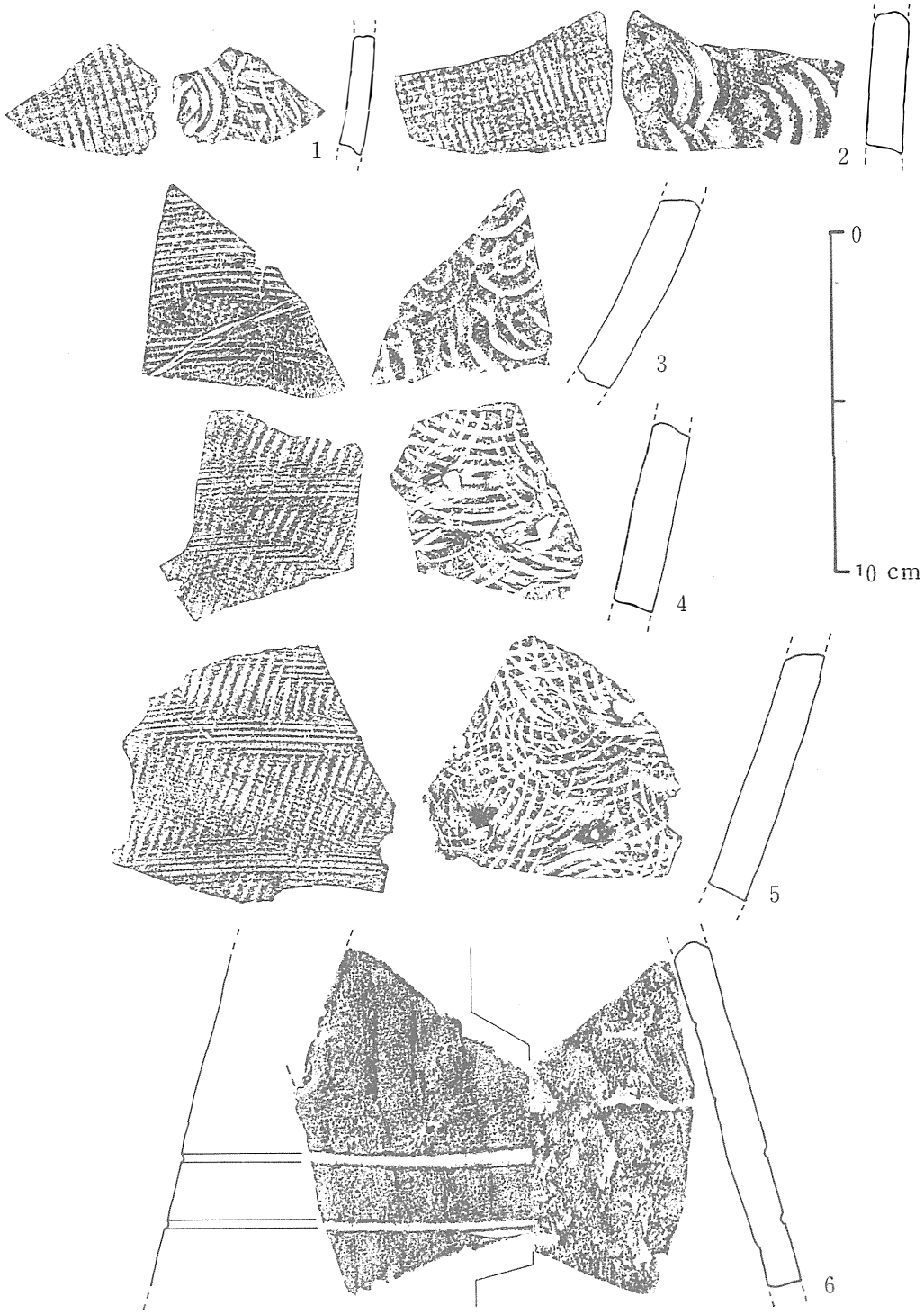


図６．採集須恵器(2)

かった．この特殊形態の須恵器が非常に多いこと，そして埴輪がきわめて少ないことは，本古墳の著しい特色と言うべきであろう．

山陰の装飾付須恵器については山本清氏の総括的検討があり（山本1960），本古墳採集品に関しても，氏による山陰の須恵器編年の第四期に属すると指摘されている（山本1968）．岡崎氏も氏の採集品を検討し，同様の結論を導いておられる．前稿で紹介した山代二子塚古墳採集品とされる脚付子持壺と比較しても，全体として簡略化・粗雑化が顕著であり，時期的に後出のものであることは疑いなく，前記二氏の評価を裏付けている．

本古墳採集の脚付子持壺には鍔状突帯をもつものともたないものとがあるが，例外的に大形で丁寧な調整をしている図5の7を除くと，岡崎氏が紹介した資料も含めてほとんどが同様な作りのものである．鍔状突帯は，祖形である器台付子持壺の器台受部の口縁をいわば「痕跡器官」として形象化しているものと考えられるが，こうした突帯を有するのは新しい時期の装飾付須恵器の一特色である．従来出土例は当地方ではあまり多くなく，松江市竹矢町出土品，簸川郡斐川町小丸山古墳出土品などが知られていたにすぎない．

ところが最近，倉吉市の上野遺跡から出土した装飾付須恵器の一括資料が紹介され（名越1983），本古墳採集品と著しい類似性を示す多くの資料をわたくしたちは知ることができた．上野遺跡出土の脚付子持壺には，山代方墳採集品と同様，親壺（体部）と脚部の接合部に鍔状突帯をもつものともたないものとがある．そしてそのいずれもが，親壺・脚部間の括れ部の形態や脚部の形態などの諸点で，本古墳採集品ときわめてよく似ているのである．おそらく時期的にもかなり近接したものと考えてよいのではなかろうか．

上野遺跡の報告者は，出土須恵器の時期について明言しておられない[11]が，伴出した丸底子持壺が松江市岡田山1号墳出土のそれと強い類似性をもっていることは，この問題についての一つの示唆を与えるものであろう．岡田山1号墳については，別稿で詳しく論じたように6世紀第4四半期を中心とした時期，言い換えれば6世紀後葉から7世紀初頭にかけての時期を想定することができる（渡辺1984a）．今日，正確な絶対年代やこまかな前後関係について論じることは困難であるが，大雑把な見通しとしては，上野遺跡の須恵器群や本古墳の須恵器も，大体同様の年代幅の中におさまるものと考えることは可能であろう[12]．これは，山陰独特のこれら装飾付須恵器に対する従来の見解（岸本1975）や，須恵器からみて本古墳より先行すると考えられる山代二子塚古墳採集品についての前稿での年代観とも矛盾しない．

4．山代方墳をめぐる若干の考察

4．1　山代・大庭古墳群の編年

前稿でも述べたように，東部出雲最大クラスの古墳が集中する山代・大庭古墳群は，ある期間，東部出雲の最高首長であった首長累家の墓域であったと考えてよい．この古墳群の編年的序列については，以前より〈大庭鶏塚古墳→山代二子塚古墳→山代方墳→永久宅後古墳〉であるとされているが，その根拠を明示した論者はいない．明確な根拠は呈示されてはいなかったとはいえ，これらの古墳の時期に関してはかなりの言及があった．それらは，鶏塚古墳を5世紀代，山代二子塚古墳を5世紀代ないし6世紀前半，山代方墳を6世紀後半ないし末，とするもので，これらの

年代観が従来ほぼ通説化していたと言ってよい（池田・大村・門脇・近藤1966，石塚・近藤1973，前島1981，平良1983，近藤1983など）．

しかしこのような年代観では，世代墓としてはその間隔が長すぎるという不自然さがあることにすぐ気付くであろう．前記したような古墳の序列は，その根拠を欠いていたのみならず，こうした不自然な編年観の上に主張されていたのである．

さて，前稿で検討したようにわたくしは，山代二子塚古墳の年代は採集された須恵器や埴輪からみる限り，その上限を6世紀中葉前後とせざるをえないと考えている．この古墳に関する従来の年代観をかなり下げようというこの見解は，いくつかの重要な論点を提起することになった．

まず第一に，ほぼ同様な規模をもつ東西両出雲の最大の古墳，山代二子塚古墳と出雲市今市の大念寺古墳とが，大体同じような時期に造営されているという，意外な事実を浮かび上らせた．第二に，前項とも関連して，出雲では他地域の多くで一般的にみられる傾向と異なり，最大規模の古墳がいずれも6世紀中ごろになって作られているという注目すべき特色を明らかにした．第三には，山代・大庭古墳群より後出のものと一般には考えられていた岡田山1号墳や御崎山古墳などの意宇川流域の古墳群とも，大した時期差がなく重なっていることを明らかにした．これらの事実が示す出雲地方の地域史の実態[13]については，すでに素描を試みたこともあり（渡辺1984 a・b），また別に論じたいと考えているので，ここではこれ以上ふれない．

そして第四に，山代二子塚古墳のこの年代観によって初めて，二子塚古墳から山代方墳へという首長墓の変遷を編年的に無理なく理解できるようになった．山代方墳は，前節で検討したように6世紀後葉から7世紀初頭にかけての時期幅の中で考えられるものであり，二子塚古墳被葬者の次の世代の首長の墓としてふさわしい存在なのである．

さて，大庭鶏塚古墳については従来5世紀代とされていたが，近年，周辺部の発掘調査が行なわれて若干の須恵器片と埴輪片が採集された．調査者はそれに基づいて6世紀中葉ごろという新説を出して（岡崎1979），従来の編年観に一石を投じられた．但し，調査者も慎重に断っておられるように，これらの資料が古墳築造時のものと断言できるかどうか疑問も残されているし，氏自身も別のところで，資料のうちに6世紀前半に遡るものがあることを記しておられる（岡崎1982）．わたくしも資料を実見させていただいたが，たとえば器台かと考えられるものや高坏脚端部の破片など，5世紀末ないし6世紀前葉まで遡らせてよい須恵器を含んでいることは確実である．従って，鶏塚古墳は，山代二子塚古墳被葬者の前代の首長の墓と考えて不自然さはない．

次に，永久宅後古墳であるが，これは採集資料も一切知られておらず，決め手を欠いている．しかし，前に述べたように，この古墳が舌状小台地上に立地せず，それからはずれた傾斜地に背後に山を負うように作られている（図3参照）ことは，一つの示唆を与えているように思う．こうした選地は，奈良県高松塚古墳の場合にも注意されている（伊達1972）が，畿内では7世紀代の古墳によくみられるものなのである．永久宅後古墳が，これまでふれた諸古墳より時代的に後出のものであることは，まず間違いないであろう[14]．

以上の検討によって，山代・大庭古墳群の

編年的序列については従来の説を再確認することになったが，そのより具体的な年代観を明らかにして，本古墳群が首長の累代墓であることを根拠をもって示しえたと思う．本古墳群は，群内に中小古墳を伴っていないことからすると，いわゆる広域首長のみを葬った墓域のようである．つまりこの土地は，6世紀から7世紀にかけての東部出雲における，いわば「王陵の谷」だったのである．

4．2　山代方墳被葬者と大和政権

山代方墳は，台地上に立地し周囲に整美な堀と外堤土塁とをそなえた正方形プランの大形方墳である．このような整った形の方墳は，一般的に方墳が多いと言われる出雲の中でも，きわめて特殊な存在であることにまず注意を喚起したい．出雲の大形方墳は，前期以来，丘陵上に自然地形を利用して築かれているのがほとんどである．墳丘プランも，長方形に近いものや造出をそなえるものなど不規則な形をしたものがよくみられ，四周に堀や土塁をめぐらしたものはない．大庭鶏塚古墳は，前にふれたように丘陵端を切断して台地に作っている点でそれまでの方墳と異なるが，二方向に造出をもつ形態で周溝はない．

このように，山代方墳以前の出雲の大形方墳には，平面形においてかなりの不規則性を有し周溝をもたないなどの共通した特徴を認めることができるのである（但し，唯一の例外は松江市月華庵古墳であって，周溝の有無はわからないが，平地に作られた整美な大形方墳で，山陰唯一の長持形石棺を内蔵していることとあわせて，この古墳のもつ特異性を示している）．

これに対して山代方墳は，造出のない正方形の墳丘を作り周囲に正方形の堀と土塁をめぐらすという，それまでにはまったくみられなかったきわめて端整な形態をとっている．つまりこの古墳は，出雲地方の方墳の中でも他と区別される著しい特色をもっているのであり，その築造には，それ以前の方墳とはまた異なる意味がこめられていると考えるべきではなかろうか．

そこで想起されるのは，山代方墳の築造年代として想定した6世紀後葉から7世紀初めにかけての時期には，畿内の大王墓やそれに準ずる古墳が前方後円墳から整備な方墳に変わるという事実である．たとえば，587年に死に593年に改葬された用明天皇の墓とされる大阪府春日向山古墳や，592年に死んだ崇峻天皇の墓である可能性の強い奈良県赤坂天王山1号墳をはじめ，奈良県石舞台古墳や大阪府山田高塚古墳（伝推古陵）などの大形方墳が，6世紀末から7世紀前葉にかけて作られている．これらのうち，とくに春日向山古墳と石舞台古墳は，整備な周溝と土塁とを囲繞させた正方形プランの方墳であり（末永1975），畿内の方墳の変遷の中でも一時期を画する特色をもっている．そしてそれは，同じ時期に築造された山代方墳においてみられる特徴ともまったく一致しているのである．このことからわたくしは，畿内の大王クラスの首長によってこのような新しいタイプの方墳が採用れたことこそ，出雲において山代方墳というそれまでとは異なる様相をもつ方墳を出現させた最大の要因であったと考える[15]．

さて，以上のようにみるならば，山代方墳の築造を，従来なかば通説となっていたような「円系墳を作った畿内直結の勢力に対抗して在地勢力がかたくなに方系墳を作り続けた」などといった見方からとらえることが，いかに皮相なものであるかがよく理解されるであろう．それどころかわたくしは，この山

代方墳築造の背景には，東部出雲の最高首長が畿内で大形方墳を作り始めた勢力，つまり，大和政権の中枢と密接な関係をとり結んでいた事実があることを想定したい．

しかも，前記した畿内の大形方墳の被葬者と目される人物がいずれも蘇我氏と深い関わりをもっていることからすれば，山代・大庭古墳群に葬られた首長が，山代方墳の時期に中央の蘇我氏と深く結びついていたことをも予想させるのである[16]．

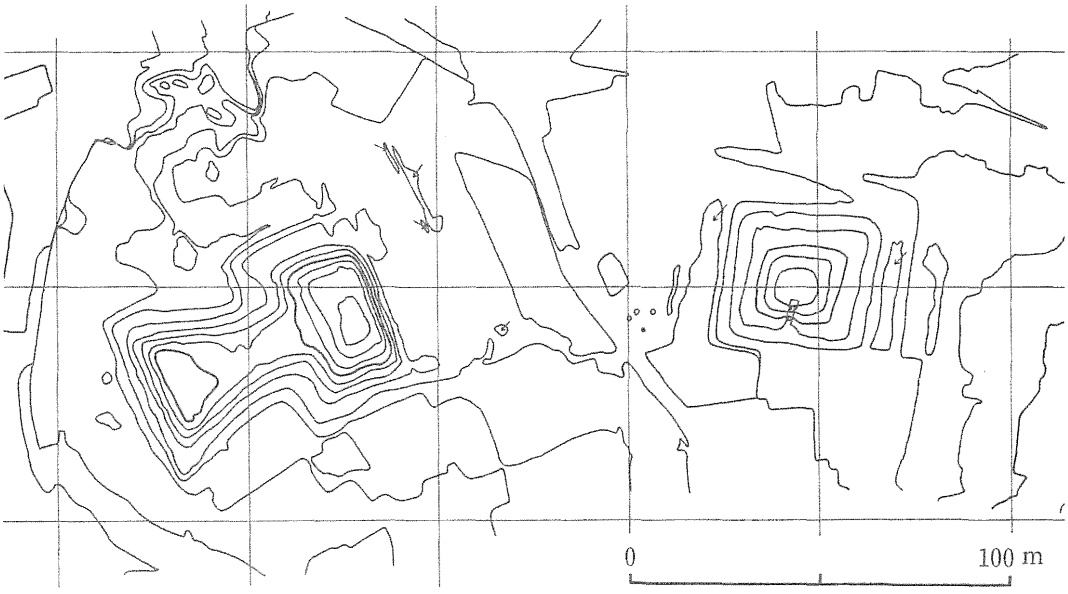
なお，もし上記の推論が正しいとすれば，山代方墳の年代についても，前章で述べた時期幅の中でもさらに限定された年代を考定できることになるであろう．

4．3　山代二子塚古墳との位置関係

今回の測量によって，山代二子塚古墳と山代方墳の正確な位置関係がおさえられることになった．図7は，経緯度のメッシュの中で両古墳の関係を示したもので，縦軸の方向が真南北である．

近接して築造された大形古墳には，その占地に相互連関性ないし連関企画のようなものが認められる場合のあることについては，すでにいくつかの例に基づく試論が出されている（梅沢1970，石部・田中・堀田・宮川1971，田中・宮川1976，渡辺1978など）．中・後期の，とくにあまり地形に左右されないで作られる大形古墳間に，このような占地企画が存在することは大いにありうることであろう．こうした古墳間相互の企画性についての検討は，大形古墳群形成のメカニズムに迫ることにもつながる重要な意義をもつと思われる．

わたくしたちが今回，両古墳の正確な関係を示せるような測量図を作成したのは，将来，発掘調査結果をふまえてのかかる検討がなされることを期待したからに他ならない．墳端の位置などのデータがない今日，あれこれの試論を出すのは好ましいことではないが，墳丘復元図による机上の作業によって考えられたいくつかの可能性のうちから一・二を示せ



（経緯度のメッシュは2”間隔，等高線の間隔は1m）

図7．山代二子塚古墳と山代方墳

ば，

1）二子塚古墳後方部中心の真東を意識して方墳石室の奥壁がセットされているのではないか．

2）二子塚古墳主軸の延長線上に，方墳外堤の北西隅が決められているのではないか．

などである．

これらはあくまでも考えうる可能性のいくつかを記したものであって，今のところ何ら確実な根拠をもつものではない．各地の古墳群で上記したような問題意識に基づく調査・研究が行なわれることを期待し，今後の検討課題として呈示したまでである．

5．おわりに

山代方墳の墳丘と採集遺物に関する検討を通じて，山代・大庭古墳群の編年作業を行ない，あわせて山代方墳の性格について考察を加えてきた．そして，山代方墳の出現が出雲地方の方墳の中でも画期的なものであったことを指摘し，その背景として，大和政権中枢と固く結びつくことによって自らの地域支配を強化しようとした地方首長の姿を想定した．この仮説が認められるとすれば，山代方墳の築造年代を6世紀最末から7世紀初めにかけての時期に収斂させて考えることが可能となろう．

6・7世紀における東部出雲の「王陵の谷」であった山代・大庭古墳群について，前稿と本稿との二回にわたって再検討を進めてきた．以上の検討は，前稿末尾に記した「地域の古墳時代史をトータルに描き出す」ためのささやかな作業にすぎず，未解明の問題も多く残されたままである．しかし，従来の史観からは導き出しえなかった新しい古代出雲史の構築が可能であることを，わたくしは確信している．

本稿を閉じるにあたって，現場で労をともにした学生諸君，便宜を図っていただいた土地所有者，そして採集資料の公表を快諾された山本清先生と助言や励ましをいただいた多くの先輩・友人の方々に，心から感謝の意を表したい．

註

(1) 戦前の新聞報道に「石槨は数十年前開口された」とある（大阪朝日島根版1940）が，定かでない．

(2) 〔山陰新聞1940〕に「偉観四方を圧する珍稀な大古墳発見」という見出しの記事がある．また，〔大阪朝日島根版1940〕にも詳しい紹介記事が載っている．

(3) 但し，後藤蔵四郎氏はこれを認めず，円墳の後世に変形したものであると主張した（後藤1943）．

(4) 山代方墳の測量調査に参加したのは次の学生諸君である．なお，田中義昭教授には全般的な指導をいただき，本庄考古学研究室の内田律雄・松本岩雄両氏にも多大の援助を受けた．また，出雲考古学研究会からは，石室実測図の提供を受けた．感謝の意を表したい．

房宗寿雄，沖田圭司，岸聡子，樋野淳巳，小笹基，角田徳幸，栢木教之，小林正人，末広泰孝，曽田稔，赤坂二史，吾郷和宏，大智浩，近藤哲雄，清水義正，手銭弘明，大谷晃二．

(5) これは明治32年測図，同34年発行の5万分の1「松江」図幅（初版）を2.5万分の1に拡大して示したものである．この地図の意義や問題点については前稿に記した．

(6) この図は，島根県土木部発行の2500分の1松江都市計画図（昭和50年10月現地調査）を基本とし，これに〔山本1972〕に付載されている井出平山の測量図とわたくしたちのとった測量図とを合成し，そ

れに多少手を加えて作成したものである．なお，大庭鶏塚古墳の海抜による測量図は未だ作られていないので，〔岡崎1979〕の付図により推定作図した．

(7) 従来「山代円墳」と呼ばれていた古墳であるが，方墳の可能性もあり，〔岡崎1979〕にならってこのように呼ぶ．

(8) こうしたずれは，千葉県竜角寺古墳群の巨大方墳・岩屋古墳でもみられるので，何か共通した理由があるようにも思われる．岩屋古墳でも，石室は旧地表面ないしわずかに旧地表を掘り下げた面に基底部を設けている．（大塚1975）．

(9) 〔石塚・近藤1973〕に「須恵器の子持壺と埴輪円筒とが発見されている」とあるが，この埴輪円筒というのは装飾付須恵器片の誤認のようである．

(10) 岡崎氏の報告された須恵器片の中には，類例がなく全体の器形がよくわからない破片が含まれている．氏はこれを福岡県沖ノ島祭祀遺跡出土の器台形須恵器と関連させて考えておられるが，やや説得力を欠く．しかしわたくしも定見をもちえていない．

(11) その後名越勉氏は，『鳥取県大百科事典』で「6世紀末から7世紀にかけての時期の遺物」と述べておられる（名越1984）．

(12) 東森市良氏は，本古墳について「6世紀末ないし7世紀初頭のものであろう」と述べておられる（東森1980）．氏は根拠を示しておられないが，本稿の考察と一致する考えである．

(13) わたくしがこれらの認識に達する以前に，それまでの通説に基づいて執筆した〔渡辺1982〕には，不正確な記述がいくつかあったことをお詫びしたい．前稿および本稿がわたくしの現在の認識である．

(14) 永久宅後古墳の立地の特徴については，曳野律夫氏から多くの示唆をうけた．明記して謝意を表したい．

(15) 畿内における大王墓の形態変化におそらく対応して7世紀に首長が大形方墳に葬られるようになる地域としては，東国の上野や総などの地方がよく知られている．著名なものを挙げれば，前橋市総社古墳群の宝塔山古墳や蛇穴山古墳，富津市の割見塚古墳，竜角寺古墳群の岩屋古墳など，見事な周溝をそなえた正方形プランの大形古墳が，このころ相次いで作られている．但し，これらの古墳には時期的に山代方墳より後出のものもあるようであり，山代方墳と同じ性格をもつ古墳ととらえてよいかは検討の余地もあろう．

(16) 山代方墳被葬者の配下にいた首長の墓と考えられる岡田山1号墳からは，蘇我氏の氏寺である飛鳥寺の塔心礎出土のものに酷似した馬鈴が検出されている．西尾良一氏は，これを蘇我氏系の工房の作品であろうと推定しておられるが，十分ありうることだと思う．

引用文献

池田満雄・大村雅夫・門脇俊彦・近藤　正　1966「山陰」『日本の考古学』Ⅳ

石塚尊俊・近藤　正　1973　『出雲文化財散歩』学生社

石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川　徙　1971　「古市・百舌鳥古墳群における主要古墳間の連関規制について」『古代学研究』60

梅沢重昭　1970　『史跡天神山古墳外堀部発掘調査報告書』群馬県教育委員会

梅原末治　1918　「出雲に於ける特殊古墳（上）」『考古学雑誌』9－3

大阪朝日島根版　1940　昭和15年5月1日付

大道弘雄　1908　「探雲記（第四回）」『考古界』8－5

大塚初重　1975　「千葉県岩屋古墳の再検討」『駿台史学』37

岡崎雄二郎　1979　『史跡大庭鶏塚発掘調査報告』松江市教育委員会

岡崎雄二郎　1982　『乃木二子塚古墳他詳細分布調査報告』松江市教育委員会
岡崎雄二郎　1983　「松江・山代方墳採集の須恵器について」『松江考古』5
岸本雅敏　1975　「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』22－1
後藤蔵四郎　1943　「出雲国史蹟史談の弁妄(七)」『大島根評論』20－3
近藤義郎　1983　『前方後円墳の時代』岩波書店
山陰新聞　1940　昭和15年4月27日付
末永雅雄　1975　『古墳の航空大観』学生社
平良泰久　1983　「国家形成期の日本海」『歴史公論』9－3
伊達宗泰　1972　「墳丘」『壁画古墳高松塚』奈良県教育委員会
田中英夫・宮川　徙　1976　「古墳群における古墳占地の企画性」『ヒストリア』71
名越　勉　1983　「上野遺跡発掘調査報告書」『四王寺地域遺跡群遺跡詳細分布調査報告書』倉吉市教育委員会
名越　勉　1984　「上野遺跡」『鳥取県大百科事典』新日本海新聞社
野津左馬之助　1925　「島根県内の古墳」『島根県史』4
野津左馬之助　1940　「大庭村の方型墳」『史蹟名勝天然記念物』15－8
東森市良　1980　「後期古墳の地域相－東部出雲」『さんいん古代史の周辺〈下〉』山陰中央新報社
前島己基　1981　「古代の出雲－古墳の展開を中心に」『古代出雲の検討』(『古代を考える』27)
山本　清　1951　「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集（人文科学)』1
山本　清　1960　「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』
山本　清　1968　「古墳」『島根県文化財調査報告書』5
山本　清　1972　「松江・井出平山古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ
渡辺貞幸　1978　「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐって」『考古学研究』25－3
渡辺貞幸　1982　「原始・古代(1)」『飫宇の入海』たたら書房
渡辺貞幸　1983　「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』23
渡辺貞幸　1984a　「岡田山1号墳研究の現状と問題点」『島根考古学会誌』1
渡辺貞幸　1984b　「考古学が復元する古代出雲と大和政権」『歴史読本』29－10

（追記）　校正中に刊行された『季刊考古学』第10号で，前島己基氏は山代方墳を6世紀半ば，山代二子塚古墳を5世紀末ごろのものとされている。本稿はこうした通説への反論である。

縮尺 1：500

山　代　方　墳

1．昭和57年8月～昭和58年6月現地測量(1：　　186)
2．等高線の間隔 0.25m
3．座標系測量 ふ
4．この図は，1.の図と航空写真測量その他による成果とを合成し縮小トレースしたものである。

1：500

ワニ丸計測株式会社調製

島根大学　法文学部考古研究室